

陸奥宗光から吉田茂までの時代

平成27年11月19日

村木 勝司

岡崎久彦の本を読んだ経緯

- 2012年のNHKドラマスペシャルで「負けて、勝つ～戦後を創った男・吉田茂～」
- 2013年大河ドラマ「八重の桜」で徳富蘇峰が日清戦争推進論を月刊誌上で展開していたとのシーン。
- マスコミ・国民に本当に責任はないのか？
- 著者は偏向史観を排除した日本の明治以降の歴史記述を志向。
- 個々の断片的な事象の歴史ではなく、明治以来の日本の近代史を通史。
- 博識の皆様の前で、浅学菲才の私が本を読んだだけで、ここで発表するのは誠に汗顔の至りであります。理解不足が多々あると思いますが、ご容赦をお願い致します。

著者 岡崎 久彦について

- 生年月日 1930年(昭和5年) 大連生まれ
1930年4月8日 - 2014年10月26日
- 職業 元外交官(1952-1992)
6カ国に勤務(アジア 3,欧米2,中東1)
外務省内では情報調査初代局長(1984)
- 今回の5冊の通史を作った理由
 - ① 偏向史観を排した真実の歴史を書く
 - ② 日本のデモクラシーの真実を書く
- 各種史観を排除するための手法
原稿を作成都度、数人の学者仲間と会合を持ち、その中の議論を通じてよりバランスのとれた、真実に近いと考える内容に修正
- 近代政治史は御厨貴、井上壽一、坂元一哉、北岡伸一、五百旗頭真:軍
事史は桑田悦、平間洋一:外交史は吉村道男、神山晃の指導を仰いだ。

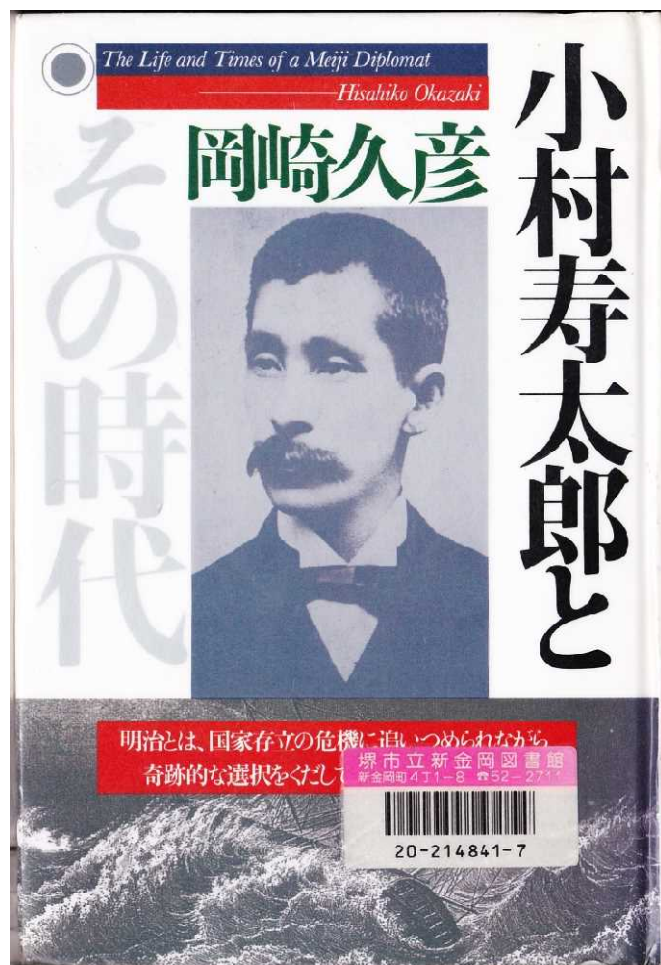


このシリーズで岡崎が書きたいこと

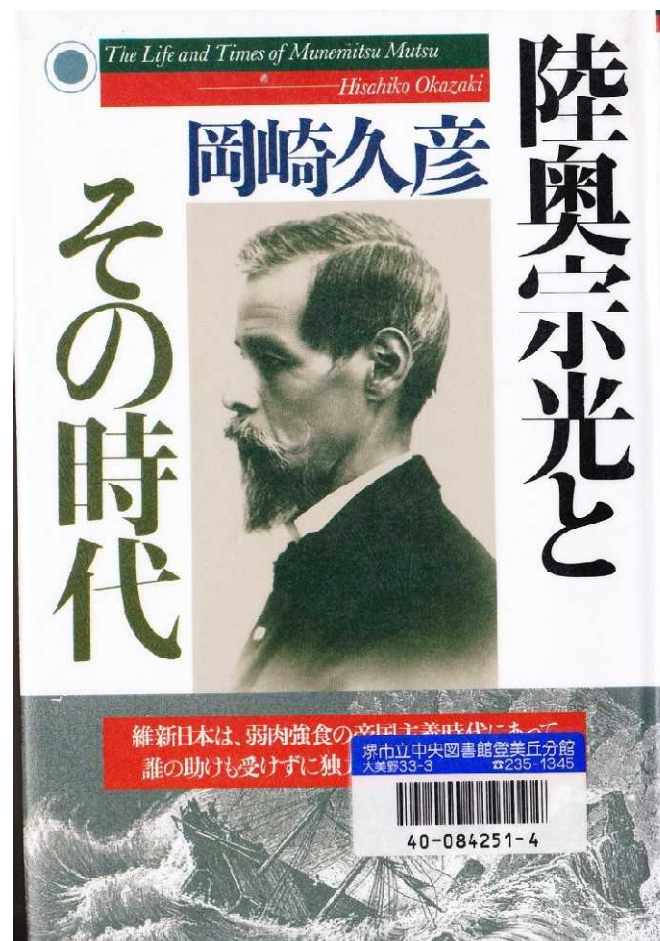
- 第1は偏向史観を除外して真実の歴史を書く(歴史の教訓 p15)
- 第2は、全編を通じたテーマ、デモクラシーの問題。(歴史の教訓 p16)
- **江戸時代**の日本は、安岡正篤(まさひろ)が言っておりますが、世界の歴史で最高の文治社会でした。後漢の二百年と徳川時代の二百五十年。**非常に高い教養社会、とにかく勉強さえすれば偉くなれる**。みんな本当に螢雪の功を積んで勉強した。そして勉強をして仕上がった人が政治をした。そういう時代。(歴史の教訓 p15)
- その時代の事から書き始めないと、**歴史の継続性**がわからない。(歴史の教訓 p16)

各種史観

- 皇国史観:「日本民族」の統合の中心を「万世一系の皇室」に求める。(ウィキペディア)
- 薩長史観:遅れていてどうしようもない国が明治維新になって急に近代化して立派になったと言う史観。(歴史の教訓、p15)
- 薩長史観・皇国史観はそれまで過去千年間日本民族が培ってきた高い文化、教育の蓄積を軽視する傾向(陸奥p480)
- 軍国主義史観:大正デモクラシーというのは腐敗墮落した拝金主義・親英米主義ということになる。ここで軍国主義史観が左翼史観につながっている。(歴史の教訓、p16)
- 占領史観:戦前まで軍国主義の下にあった日本が占領でいっぺんに民主化したという史観(歴史の教訓、p15)
- 自虐史観:自国の歴史の負の部分のことさら強調。正の部分を通小評価する。占領統治と東京裁判を通じて「日本は悪である」との考え方を押し付けられた。(ウィキペディア)



全329頁



全483頁

陸奥宗光とその時代1

- 陸奥宗光は1844年、和歌山藩士伊達宗広の六男として誕生。
- 岡崎久彦の祖父である岡崎邦輔の母親は陸奥宗光の母親と姉妹で、陸奥宗光と岡崎邦輔は従兄弟の関係。
- この書は、父親伊達宗広の生涯から書き起こし、明治25年に伊藤博文内閣で外務大臣、日清戦争の開戦・講和条約間の外交史を主題。
- 徳川から明治の歴史は不断の流れがある事を明らかにしたものの。

陸奥宗光とその時代2

- 薩長史観や皇国史観は徳川幕府が倒れて明治になって、日本は何もかも新しく生まれ変わったと考えた。
- 戦後の左翼史観も同じように敗戦と占領によって古い日本は全て歴史の過去に捨て去られ日本は新しく生まれ変わったと思っている。
- こうした一方的な観念的な史観によって、ズタズタにされてしまうと現在も将来も見えなくなってしまう。(p480-481)
- それを正すために明治維新から敗戦までの日本外交の歩みを辿る5冊の通史の第1冊目。(全483頁)

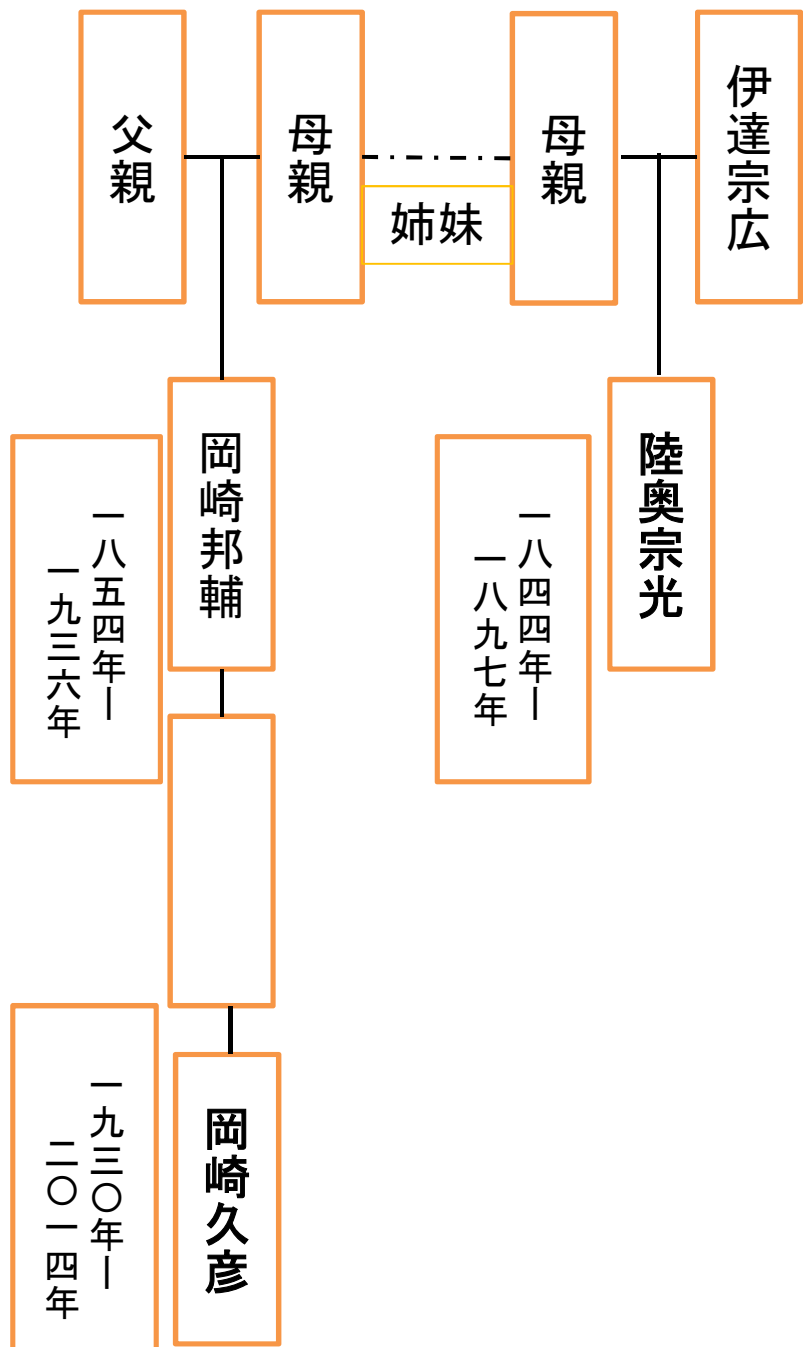
小村寿太郎とその時代1

- 小村は1855年(安政2年)九州飫肥藩(おびはん) 徒士の長男として誕生。
- 15歳までは徳川時代の伝統的教育を受け、常に最優秀。15歳で長崎の英語塾、16歳から大学南校(開成学校前身)に小藩の貢進生。21歳で第1回文部省留学生(10人)としてハーバード大学に。
(p19)
- 本書は通史5冊の中の2冊目。日清戦争後、日英同盟から日露戦争についてが主題。(全329p)

小村寿太郎とその時代2

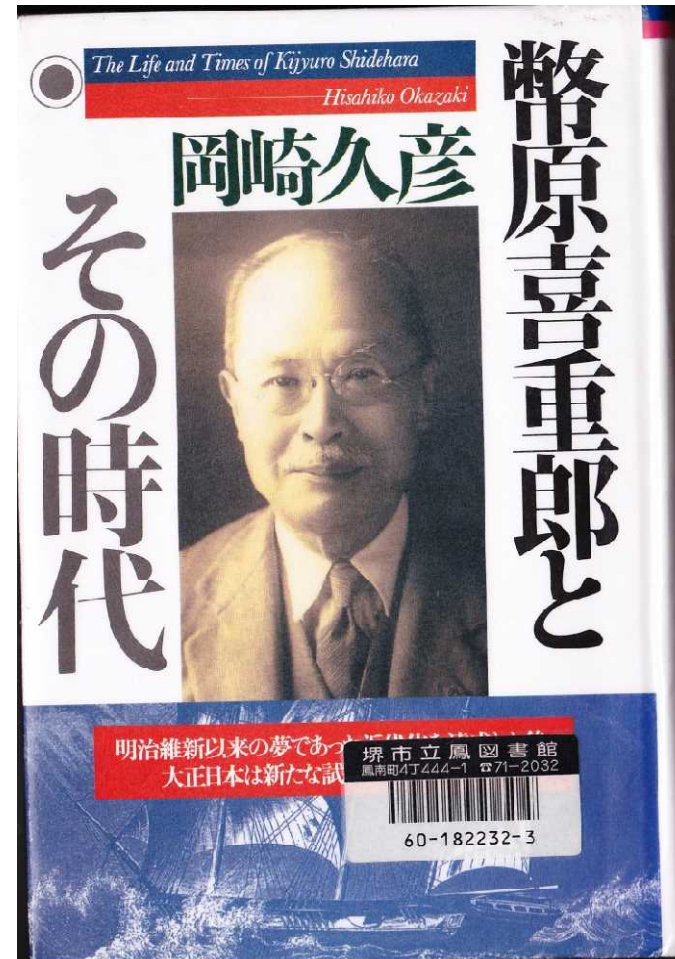
- 陸奥と小村は180度異なるタイプの日本人。にもかかわらず
陸奥が小村を登用。
- 陸奥は議会民主主義の正道を理解し、実現しようとした日本
では例外的な少数の人。欧化主義者、多弁、自由闊達。
- 小村は官僚を中心とする超党派的立場から客観的な国益を
守ろうと言う人。国粹主義者、寡黙、禁欲的。他人から見ると
偏屈、言動は矯激、畢竟は国のためで、私心は全くない。
(p29)。まさに狂者であり猿者(けんじゃ)。日清・日露という日
本の危機の時代に余人に代え難い。(p34)

陸奥宗光と岡崎久彦





全429頁



全376頁

幣原喜重郎とその時代1

- 幣原は1872年(明治5年)大阪門真村豪農の次男。
- 明治生まれの新世代人、真面目な秀才、三菱財閥岩崎弥太郎の末娘と結婚。
- 1896年(明治29年)第4回外交官試験に合格。**外交官試験合格者が外務大臣になった最初。**
- 5冊の通史の3冊目(全376頁)。1911年(明治44年)の辛亥革命から1931年(昭和6年)の満州事変までの20年間の歴史。
- この期間は**日本近代史の中で扱いのもっとも難しい時代。**
(p366)

幣原喜重郎とその時代2

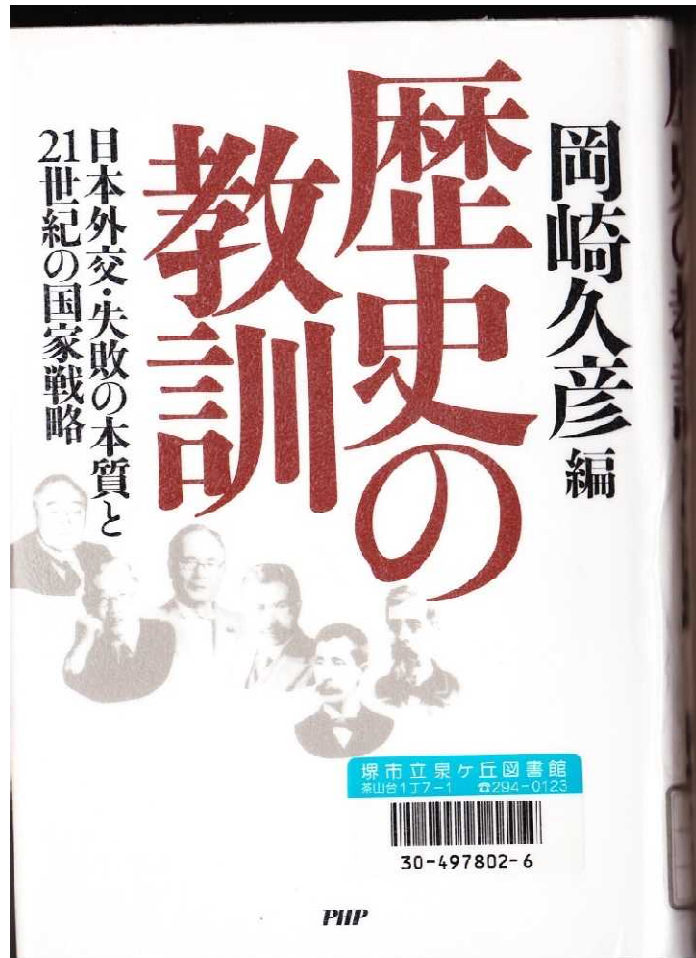
- 信念は日本の権利を主張するばかりでなく、相手の権利も尊重する事と国際約束は内閣の更迭があっても守る、1924年(大正13年)外務大臣就任の歴史的演説で表明し、在任期間中きわめて一貫性が高い
- この時代に対して明確なイメージを持っている人は少ない。(同)。理由は人間の記憶の短さとこの間の歴史の真実がありとあらゆる偏向史観の為にまともな理解が困難になっている為。(p367)
- 1914年(大正3年)第1次大戦勃発後、日本は大正デモクラシーを謳歌し、滔々とした軍国主義反対、デモクラシー讃美。(p229)
- 「軍人は電車に乗るのも軍服では気が引け、人混みの場所にはなるべく平服で行くような時代。」(伊藤正徳)(p230)

重光・東郷とその時代1

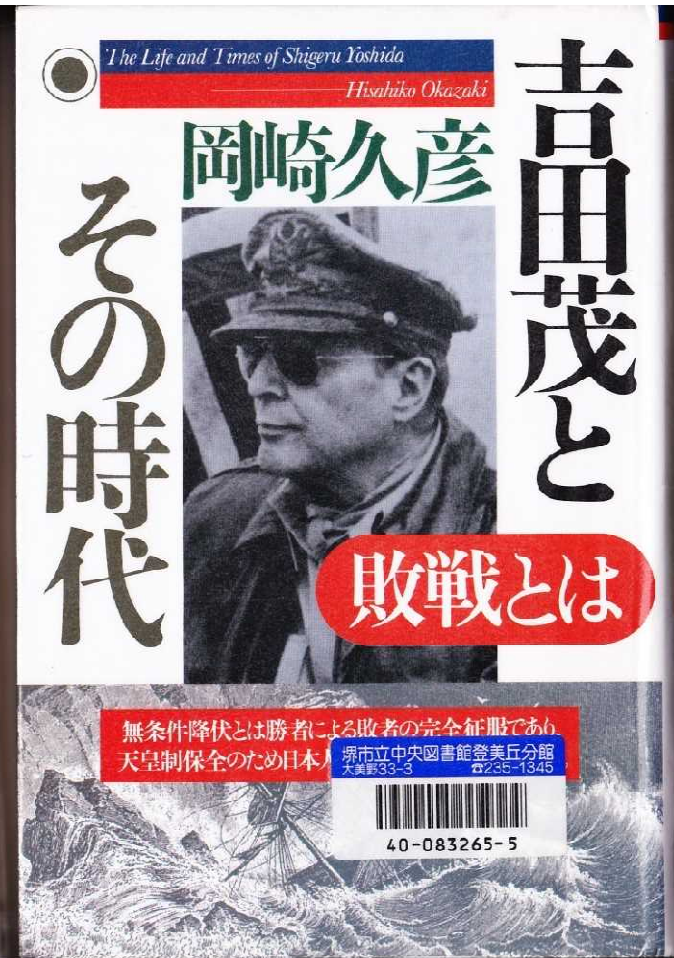
- 重光葵は1887年(明治20年)九州大分県大野郡長の次男として誕生。
- 東郷茂徳は1882年(明治15年)鹿児島県苗代川村の陶器商人朴壽勝の息子として誕生。
- 5冊の通史の4冊目。満州事変から敗戦までの14年間の歴史。(全429p)
- 満州事変以降の「歴史的な勢い」がある中でプロの職業外交官がそれとは違う選択があるという事を必死に追い求めながら、最も正統的な外交を展開しようとした人物として2人を選んだ。(歴史の教訓p101)

重光・東郷とその時代2

- 東郷は1941年(昭和16年)4/20-1942/9/1と1945年(昭和20年)4/9- 即ち開戦と終戦時の外相。
- 重光は1943年(昭和18年)4/20-1944年(昭和19年)7/22の戦時中の外相。
- 負けた戦争の時には負けた要因、或いは負ける戦争をしないように初めから戦わないようにするにはどうすべきだったのか、を毎頁の様に書かれている。(歴史の教訓p102)



全228頁



全328頁

吉田茂とその時代1

- 吉田は1878年(明治11年)東京で高知県出身竹内綱の5男として誕生。3歳で竹内の親友の貿易商吉田健三の養子となる。
- 5冊の通史の最後。敗戦から講和条約までの6年間の歴史。(全p328)
- 占領史研究はやっと緒に就いたばかり。まだまだ通史として纏められる時間が経過していない。(p302)。
- 著者は戦争に負けるところで本を書くのはやめるつもりであった。(歴史の教訓p181)
- 五百旗頭真氏の著書「米国の日本占領政策」からの引用が多い。(p11)

吉田茂とその時代2

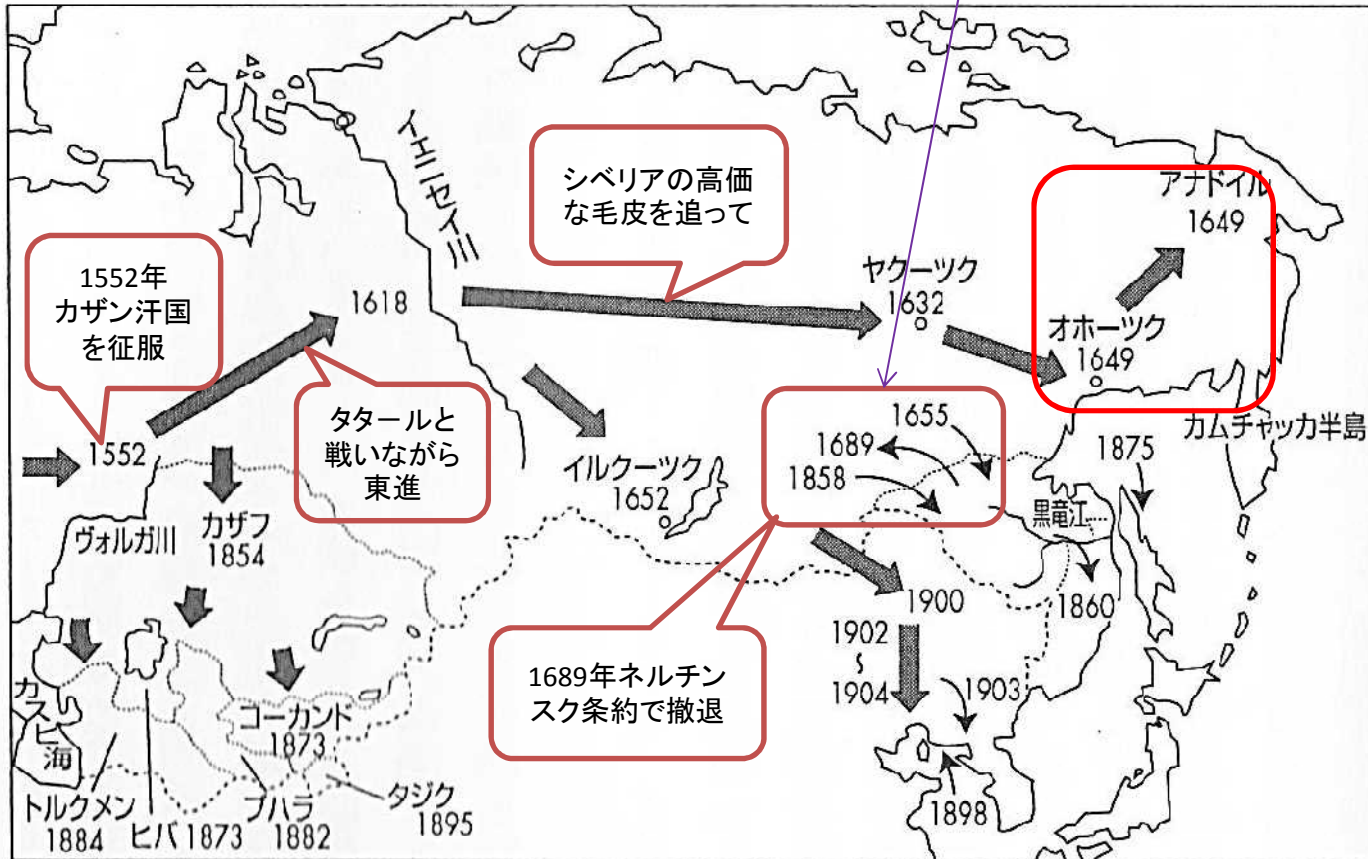
- この章のテーマは敗戦後7年間、事実上の主権喪失と米軍による占領は日本社会と日本人の精神構造に深甚な影響を及ぼした。また、占領後半期以降、冷戦時代の異常な国際環境の下で国際共産主義勢力や日本の国内左翼によって、占領初期時代の思想、教育が温存され増幅されて、国民の間に深く浸透していったという二重の構造がある。(p302)
- 最終章は「公正な日本近代史を阻むもの」であり、国民感情の自由な流れを阻害する人工的な障害{憲法9条と東京裁判の判決}を取り除くことはできる。(p325)

一度ロシアの国旗が掲げられた土地においては決してそれが降ろされてはならない。(ニコライ1世1858年)

ロシアの領土拡大

当初はタタールに対し生存を賭けた自衛的なもの

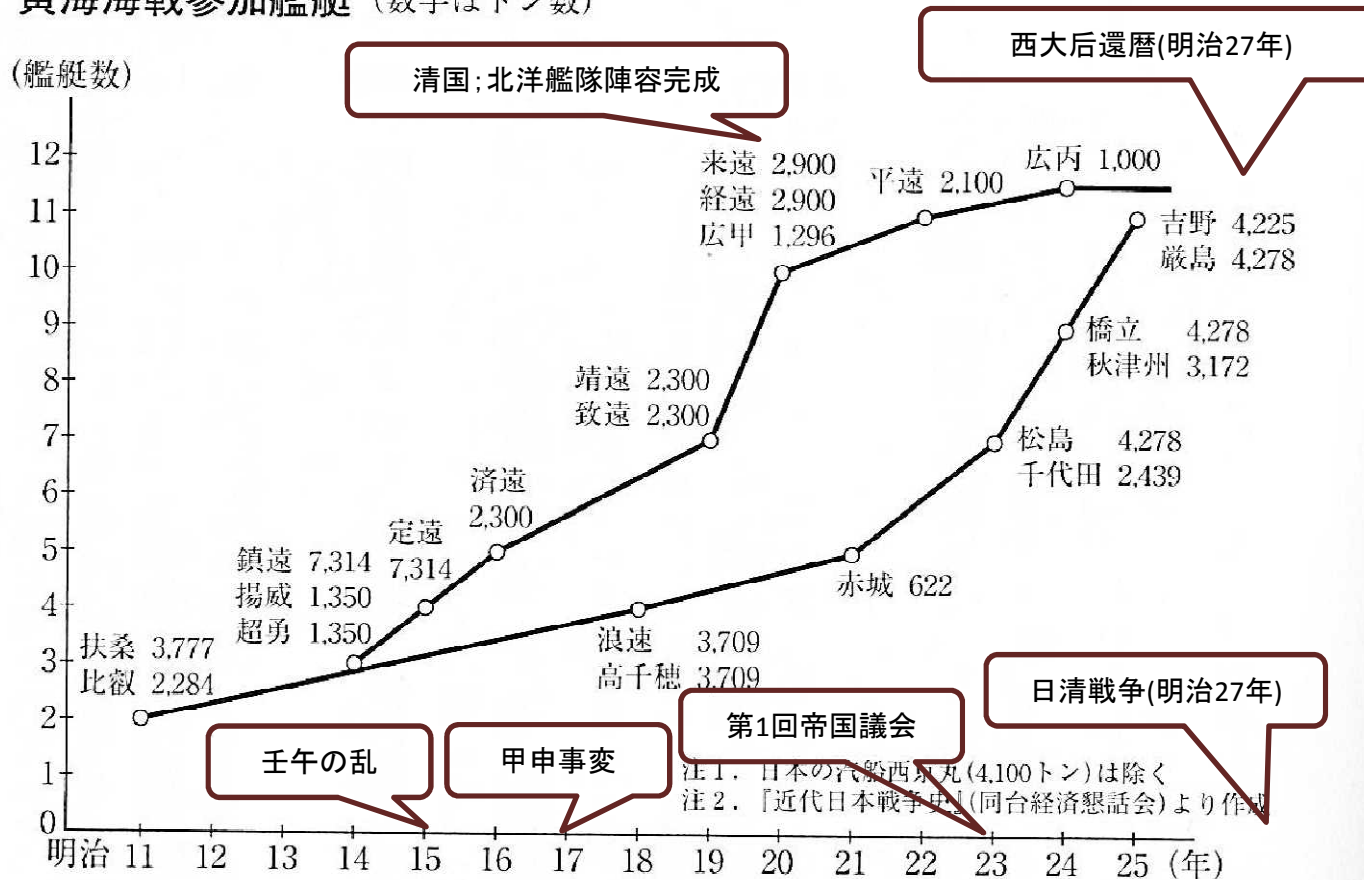
1639年 日本が鎖国



国境線は1メートルでも遠い方が良い。 図出典:小村 p101

第十七章 日本軍の快勝

黄海海戦参加艦艇 (数字はトン数)



日清戦争開戦: 明治27年7月25日(豊島沖海戦) 図出典: 陸奥 p379

日本と清国との帝国主義競争

- 壬午の乱(1882年)から日清戦争(1894年)に至る歴史は阿片戦争(1840年)で近代帝国主義の厳しさを知り、**帝国主義に目覚めた中国**と、ペリーの来航(1853年)で眠りから覚めた日本とが世界的な**帝国主義競争に参加する事を志して**、朝鮮半島を舞台に争った歴史。どっちが正しいとかそういう問題ではなかった。(陸奥p277)
- 第1(1882年)、第2ラウンド(1884年)では清国の圧倒的優勢勝ち、**第3ラウンドで実力を五分五分までつけてきた日本が清国の油断に乗じて戦いを挑んで清国をノックアウト**。(陸奥p277)

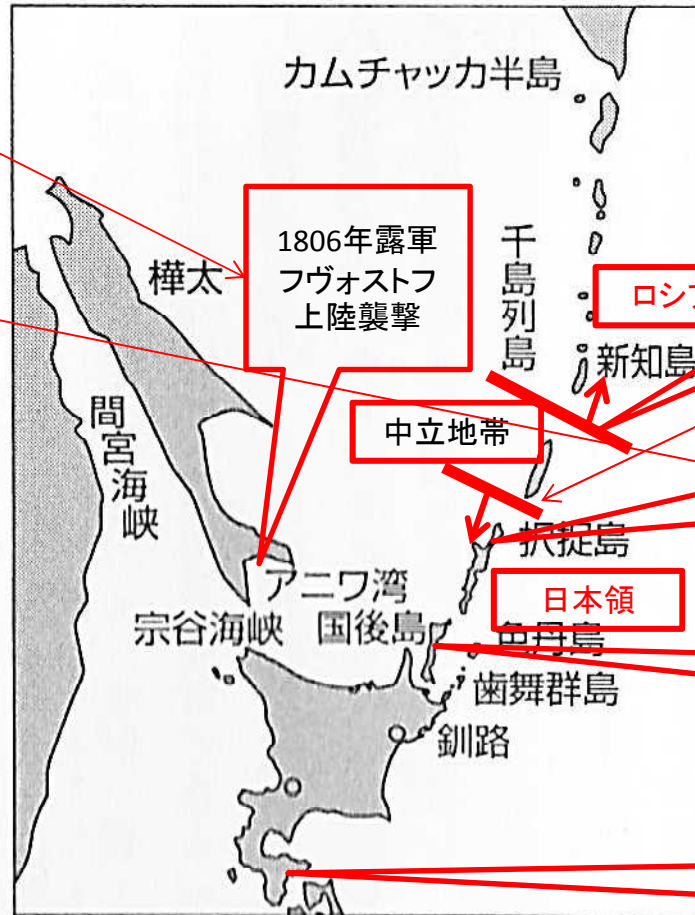
朝鮮半島的情勢

- 「日清戦争は一に朝鮮事変{壬午の乱(1882;明治15年)}を導火線とする」王芸生(おううんせい)(陸奥p270)
- 朝鮮半島は欧米の極東進出の最後の到達点(ロシアが元山に1865年、仏が1866年、米が1871年)
日本への黒船来航は1853年。
- 朝鮮は地形を利用し欧米軍を撃退し攘夷に成功。大院君の攘夷思想固まり、開国が遅れる。
- 高宗の成人で院政終了(1873年)。開明政策に転換。
- 旧式軍隊の不満による反乱を利用して、大院君がクーデターしたのが壬午の乱。(陸奥p271)

阿片戦争の40年前、ペリー来航の50年前
ロシアは日本との修好を要望したが、でき
ないと判ると領土拡張を図った。

日本の北辺地図

1804年レザノフは皇
帝の命を受け長崎
に日露修好を要望。
半年後不可となり、
カムチャッカに帰る
と武力で威嚇を指
示。



1855年日露和親条約(下田条約)に
より国境線画定(図示線)。
1875年樺太・千島交換条約で千島
列島を日本領、樺太をロシア領とし
た。

図の出典:小村p109

日露戦争中の外債募集状況

戦費見積：4億5千万円、1/3を外貨要。1億円(= ￡ 1千万)を公募。戦費は最終的に20億円近く要した。

高橋日銀副総裁英国で公募。
内半分は米国で調達

高橋英国派遣時目標5%以下。黄色人種の起債且つ日本が勝つ保証無い

発行時期	発行総額 (ポンド)	利率 (%)	発行価額 額面百ポ ンドに付	政府手取 同 左	手数料 同 左	担 保	償還期限
第1回 明治37年 5月	1000万	6.0	ポンド シリング 93, 10	ポンド シリング 90, 00	ポンド シリング 3, 10	関税収入	7カ年 (内3カ年) 据置
第2回 明治37年 11月	1200万	6.0	90, 10	86, 15	3, 15	関税収入	7カ年 (内3カ年) 据置
第3回 明治38年 3月	3000万	4.5	90, 00	86, 15	3, 05	タバコ専 売益金	20カ年 (内5カ年) 据置
第4回 明治38年 7月	3000万	4.5	90, 00	86, 15	3, 05	タバコ専 売益金	20カ年 (内5カ年) 据置

日本が着々と勝利を重ねるたびに
応募者も増え、条件も緩和

日英同盟の利点の一つは「財政上の便宜を得ること」。
英米の債券市場なしに日露戦争遂行不可だった。

表の出典：小村p184

日英同盟1

- 日英同盟、小村の意見書が英か露かの選択に決着をつける。(小村 p141)
- 世界を二分する超大国(小村p143)
日本開国前後における極東の力のバランスは北から来るロシアと南から来るイギリスに二極化していた。
英露が世界を二分する超大国になるのはナポレオン戦争の二大戦勝国になってから。(小村p144)
幕末の日本が一步踏み外せば深淵ばかりの帝国主義時代を生き延びられたのは畢竟は自分の力と自分の判断で時局に当たったから。(小村 p145)
- 臥薪嘗胆。19世紀後半、列強の主な関心はオットマン帝国の分割、アフリカの分割、中央アジアの征服等東アジア以外の地域。日本・清国は国際関係に煩わされずに近代化に専念。(小村p146)

日英同盟2

- 伊藤内閣が第9議会で軍備の大拡張。戦争予算である1895年海軍費が13百万円、平和になった翌年が3倍の38百万円、その翌年がその2倍の76百万円。国内大增税+日清戦争の賠償金の9割を軍事費に。(小村p148)
- 尾崎行雄が日清戦争後の海軍拡張案に対し、国会で「日本の歳入は2億5千万円、ロシアのそれは20億円。こんな大国と軍備競争をして勝てるわけがない」と言った。(小村p135)
- 名誉の孤立の終焉(英国の極東における海軍力の相対的低下)小村(小村p158-9){次の表参照}
臥薪嘗胆の下の軍拡は日本を国際政治の一単位とするまでに強力に。
- 日露開戦(1904年,明治37年)の背景には日本の弱点を補う「日英同盟」(1902年,明治35年)があった。(小村p165)

日英同盟3

- 開戦外交 日露の交渉断絶通告後、小村は英米両国の諒解と指示を得て他国の干渉を排除した。(小村 p179)
- イタリアで建造中の重巡2隻が竣工に近いという情報が英国から、露が知るより1日早く。旅順砲撃で威力発揮の日進・春日。回航時にも英国重巡が露艦との間に入ってインド洋まで保護。(小村 p181)
- 資金と情報の供給源 戦費の海外調達に高橋是清が英国へ。戦争中に4回募集。(小村 p183-4) 1902年(明治35年)日英同盟締結後すぐ英国から日英軍事協議の提案有、情報交換については特に念入りな合意。(小村 p185)

世界史の分岐点

- 日本海海戦の世界史的意義(p259)
- **ロシア革命**と言う20世紀まるまる一世紀の世界の動向を左右する大事件の発端の一つとなった。(p260)
- 非白人の奮起(p261)
ネールは「アジアの一国である日本の勝利はアジアのすべての国々に大きな影響を与えた。ナショナリズムはますますアジアに広がり、『アジア人のアジア』の叫びが起こった。」
孫文は「日本の力は日本人自身に一等国の特権を享受させただけでなく、他のアジアの人たちの国際的地位も向上させた。」
- 1906年のペルシャ革命、1907年のインド国民会議派の急進化、1908年のトルコ革命、1911年の辛亥革命のすべての裏に、日露戦争における**日本の勝利の心理的影響**がある。
- それがまた白人諸国の日本に対する警戒心を呼び起こしたことも否定できない。その後日米間の大問題となる日本人差別問題の背後には、**日本に対する警戒心、すなわち黄禍論の影響**が少なからずあった。

日本のデモクラシー1

- 日本のデモクラシーの始まりは米軍の占領ではなく、1890年(明治23年)第1議会に求めるのが正当な歴史的解釈であろう。(陸奥p220)
第1回総選挙は干渉も腐敗も全くなく理想的に行われた。(陸奥p205)
迷惑がる立派な人物を無理やりに選挙民が選挙するありさま。(陸奥p207)
- 第1議会で予算案を民党が1割削減要求するが、軍事費を除いた7%削減を党首板垣が自由党を割って国家を第一として予算案を成立させた。もし否決されていたら、憲法停止せざるを得なかった。そうならば日本の政治の評価は浮揚せず、不平等条約の改正は出来なかっただろう。(陸奥p213,217)
- 第2回臨時総選挙は官僚の民党圧迫、選挙民の買収、投票偽造など、大々的な干渉をした。(陸奥p229)

日本のデモクラシー2

- 「デモクラシーは最悪の政治である。うんざりするような政治。けれどもかって現実に存在した他の政治よりましだ。」チャーチル。即ち他の政治を全部経験しないと、デモクラシーが良いという事が判らない。(歴史の教訓p107)
- 日本は1回目は駄目に、2回目に大正デモクラシー。大陸で中国の国権回復運動が強くなったり、不況が来たりすると日本人は他の制度が全部駄目という事を知りませんから、軍人の方が良いのではないかと思う。デモクラシー自身の不備だったから軍に取って代わられたと言うので無しに、デモクラシー自身の本来的な性質としてそうなった。軍が先に立って政権を取ったという事でなく、新聞と国民が先に立って、もう政党は嫌だ、という事になったと思う。(歴史の教訓p107-8)
- 現在は三回目。もう誰もこれ以外選択肢があると思っていない。選択肢がないとデモクラシーが残る。安定する。ただそれだけのこと。(歴史の教訓p108-9)

デモクラシーの難しさ

- 政治というのは、人民のために善い政治を行う事。誰でもわかる話だが、**権力をみんなに分けてしまうと自ずから善い政治になるなんてことは普通の人にはわからない。**これはイギリスが五百年かかって、経験でそう学んだ話であり、維新の時は伊藤博文も陸奥も、西郷隆盛も木戸孝允(たかよし)も大久保利通(としみち)全然わかっていない。(歴史の教訓p17)
- **国民に権利を分け与えなければ駄目だ**といって全くブレなかったのが板垣。そしてついに憲政というものを実現。(歴史の教訓p16)
- **板垣が作った自由党がそのまま立憲政友会になって今の自由民主党になっている。**自民党が板垣の自由党が作ったデモクラシーの主流。そのつながりが戦後の歴史ではメタメタになっている。(歴史の教訓p16)

大正デモクラシー

- 反軍思想が昂揚。原内閣成立から10余年間軍の権威が低下、大正11年8月の新聞投書に「停車場辺りで軍人が俤を呼べば、車夫は傲然として『冗談じゃない。歩いたらいいでしょう』と剣突を喰らわす。」(幣原p210,230-1)
- 軍閥、藩閥に対する鬱積した反発が山県を契機に一挙に噴出した(幣原p232)
- 関東大震災時に陸軍は献身的に災害救助に努め、国民の信望を得た。反軍思想の昂揚は若干落ち着く。(幣原p231-2)
- 大正デモクラシー時代の国民の反応の中には、何か根源的な自由が感じられる。(幣原p232)
- 大正デモクラシーの内容は、普選運動、言論・集会・結社の自由、男女平等、団結権、自由教育の獲得、大学の自治権獲得運動など種々な自主的集団の運動展開。呼称は1954年(昭和29年)信夫清三郎の本。

議会民主主義・政党政治達成への流れ

- 源は自由民権運動以来の、各選挙区の地盤(明治14年自由党結成)に深く根ざしている。藩閥政府側は親政府党を作って対抗しようとしたが、崩れるような地盤ではない。伊藤博文自身が[政友会総裁](#)となる事で、日本の権力の一部と認められた。その後も着々と力をつけ議会の多数を占めた。(幣原p98)
- **陸海軍大臣現役武官制**が政党内閣の力をそいできた。これに対抗する政党の手段はプロシヤ憲法にない明治憲法の第71条「**予算が成立しない場合は前年度予算と同じにする**」という予算の議定権。(幣原p99)
- 政党政治腐敗の進行は(大正3年)大隈内閣下での総選挙で藩閥が大々的に協力し、警察が露骨な選挙干渉をし、更に財界も動員されて、桁違いの莫大な資金が投入され、**新時期を画したと言える金権選挙**が行われ、政友会は80名減の第2党に転落。(幣原p100)
- 政友会の原は山県の懐柔を図り、寺内内閣の総辞職後、西園寺の推挙で山県も了承し、1918年(大正7年)初の[政党内閣](#)(陸海軍大臣を除いて政党人)が誕生。(幣原p105-6)

明治初期の政党の変遷

	総理大臣	政党の変遷
1885	伊藤博文	自由党(板垣退助) 1881~
1888 1889	黒田清隆 山県有朋	立憲自由党(板垣退助) 1890~
1891 1892	松方正義 伊藤博文	再建(自由党と改称) 1891~
1896	松方正義	立憲改進黨(大隈重信) 1882~
1898	伊藤博文 大隈重信 山県有朋	進歩党(大隈重信) 1896~
1900 1901	伊藤博文 桂太郎	憲政党(板垣退助・大隈重信) 1898~
1905	西園寺公望	憲政党(旧自由党系) 立憲政友会(伊藤博文) 1900~
		憲政本党(大隈重信) 1898~

表の出典:小村p77

大正時代の年表

- 1912年(明治45年、大正元年)中華民国成立、西園寺内閣総辞職
- 1913年(大正2年)憲政擁護運動高まる、軍部大臣現役武官制を改正
- 1914年(大正3年)第1次世界大戦勃発、対独宣戦布告、好景気に
- 1917年(大正6年)ロシア10月革命
- 1918年(大正7年)原平民内閣発足
- 1919年(大正8年)パリ講和会議、ヴェルサイユ条約
- 1920年(大正9年)海軍八八艦隊計画議会通過、戦後不況始まる
- 1921年(大正10年)原敬暗殺、日英米仏4国協定成り、日英同盟失効
- 1922年(大正11年)山県死亡、ワシントン会議終了(海軍軍縮他)
- 1923年(大正12年)関東大震災
- 1924年(大正13年)アメリカ、排日移民法制定
- 1925年(大正14年)普通選挙法、治安維持法制定、宇垣軍縮実行

明治憲法の不備

- **大正政変**の中で、昭和になって軍閥の跳梁を許すことになる明治憲法の不備が明白に。第55条に「国務大臣は天皇を輔弼しその責に任ず」とあるだけで、**総理の大臣任命権も内閣の連帯責任も規定していない**。現行憲法は「内閣は連帯責任を負い、国務大臣は総理が任命する」と明記。(幣原p33-4)
- 西園寺内閣の命取りになった**陸海軍大臣現役将官制**は、1901年(明治34年)第2次山県内閣時に省制が決定された。大正政変後の山本内閣で予備役、退役の将官でも良いと改訂された。しかし軍の力が強く、一度もそれが実行されることはなく、1936年(昭和11年)二・二六事件後、現役武官制に再度改訂。(幣原p33)
- 戦前の日本近代史の全期間を通じて、軍の発言力を強大にさせたのは、統帥権の独占よりも、**陸海軍大臣は現役の武官でなければならない**という制度であった。この事により**事実上軍部の承認が無ければ組閣は不可能**。二・二六事件以降は陸軍は新しい内閣の政策や他の閣僚人事まで注文を付け、その言いなりにならざるを得なかった。(小村p83)

大正政変

- 明治天皇崩御で激変。明治はたちまち遠い過去。(幣原p28)
- 第2次西園寺内閣は、日露戦争後の国際総額26億円の半分以上が外債。利払いだけで6千万円。貿易収支は輸入超過。このため行政整理で従来予算の8~15%の削減。陸軍が3%のみで、その削減額で2個師団の増設提案。西園寺が拒否すると上原陸相は大正天皇に直接上奏し単独辞職。山県は後任の指名をせず。このため西園寺はあっさりと辞職。2個師団増設には各新聞は陸軍の横暴に批判した。(幣原p29-30)
- 桂が第3次総理。2個師団増設に海軍が反対し、海相を出さない。不謹慎にも桂は大正天皇の詔勅を得て、前斎藤海相で組閣。世論は激昂、憲政擁護運動で議会を取り囲み、更に全国に広がる。政友会、国民党は内閣不信任案。結局2か月で辞職。(幣原p30-32)
- 政友会総裁の西園寺は天皇からの詔勅で不信任案の撤回を働きかけたが、実行できなかった責任を取って総裁辞任。これらの動きが大正政変。(幣原p32)

太平洋戦争関係年表

- 1931年(昭和6年)[満州事変](#)、政府不拡大方針発表
- 1932年(昭和7年)上海事件、満州国建国宣言、五・一五事件
- 1933年(昭和8年)ヒットラー内閣成立、国際連盟脱退
- 1934年(昭和9年)ワシントン海軍軍縮条約破棄決定、全国的に大凶作
- 1935年(昭和10年)第7回コミンテルン大会、[中共抗日統一戦線提唱](#)
- 1936年(昭和11年)二・二六事件、スペイン内乱、西安事件
- 1937年(昭和12年)[盧溝橋事件](#)(北支・支那事変)、蒋介石対日抗戦総動員令
- 1938年(昭和13年)ドイツ・オーストリア併合、国家総動員法
- 1939年(昭和14年)第2次世界大戦(独・ポーランド侵攻)
- 1940年(昭和15年)日米通商航海条約失効、日独伊三国同盟
- 1941年(昭和16年)独・ソ連侵攻、真珠湾攻撃、蒋介石日本に宣戦布告

満州事変

- 満州事変は起こる必然性がなかった。(歴史の教訓p131)
- 南京政府としては日本と戦争する気なんかなかった、張学良が無理やり戦争に持って行った。引きずられて国民党がインティファダをやった。**在満の日本人**は嫌がらせで苦勞して、日本軍の援助が欲しい、そうでなかったら日本から**独立してでも戦うという雰囲気**になった。(歴史の教訓p132)
- その先では西安事件でそれまでは共産党を消滅させるつもりでほとんど消滅寸前まで進んだ**蒋介石を翻意させて国共合作**にしてそれを支那事変にもっていったのも**張学良**です。遡ると父親の張作霖を殺した恨みです。(歴史の教訓p132)
- 支那事変、大東亞戦争になるという過程で、日本の国内状況でもなし、日本の外交でもなしに一番大きな原因は、中国の戦略とコミンテルンの戦略ではないか、**なんとかして日本を大戦争に持っていくように初めから考えていて、それに日本が乗ってしまった**。(歴史の教訓p134)

満州の移民政策は失敗だった。

- 日本からアメリカに行った移民は約10万人。大正時代の後半に日本から満州に行ったのも約10万人。対米移民は政府からの支援は何もなしでなんとかやっていた。中国に行ったのは基本的に満鉄、関東省、その他の準政府機関の関係者。移民と言うのは貧しい国から豊かな国に行くもの。貧しい国の現地の中国人労働者と競争するなどという事はありません。(歴史の教訓p124)
- その間に満州の人口は数千万人まで膨張。大部分は中国人。満州に日本がもたらした一定の安定の下に混乱する本土から大勢の漢民族がやってきて圧倒的な多数を作り上げた。(歴史の教訓p125)

15年戦争における日中の戦略1

- 蒋介石は「日本陸軍の目標はソ連、海軍の目標は英米。日本はいずれ負けることが確実な大戦争を起こすだろう。それが民族復興の最善の機会である。」(歴史の教訓p134)
- コミンテルンは一貫して日本と国民党を戦わせる。国民党と戦って、やがて英米と戦う。その方向に持っていくのがコミンテルンの戦略。(歴史の教訓p134)
- 日本と言うのは全く戦略がなかった。外務省と陸軍省がなんとか大綱という紙を書いて上へ持っていき、役人の間に回すと「ここを削れ」などと言って、文章だけを合わせて、まあこれなら反対はないだろう、と言うものを上に揚げて、これが大綱だと決める。作ってから誰もそれを守る気もない。つまり、全く戦略と言うものがなかった。(歴史の教訓p135)

15年戦争における日中の戦略2

- しかもちょっと想像できない位無能な人が権力の中枢にいた。岡崎は**戦争責任者は近衛と広田弘毅と杉山元**になると思う。他に海軍の永野修身。結局、**何もしない**人たち。**大勢順応**で責任を取ろうと言う意思はない。支那事変は3人の内1人でもいなければ解決していたと思う。(歴史の教訓 p135)
- 支那事変が始まってすぐに、天皇陛下がやめろと言う。外務省の石射猪太郎、参謀本部の石原莞爾が北支からの日本の撤兵の解決案作る。中国からの返事が来る前に石原を軍が突き上げて追い払う。中国の諒解の返事を確認する段階になって杉山を突き上げ、**杉山**が「下から突き上げているから、前言を撤回します」。**広田**がまたこれに一言も抗議しない。それで終わり。3人の内一人でも見識があったら、支那事変は終わっていたかもしれない。本当に**日本側に戦略が無く、中国とコミンテルンに明快な戦略があった**。その戦略に負けたという気がしています。(歴史の教訓 p136)

支那事変

- 支那事変の原因は殆ど中国側にあった。(重光・東郷p169)
- 昭和12年盧溝橋事件については日本側の秘密工作のにおいが全くなく東京裁判でさえその点を問題にしていない。(重光・東郷p164)
- 大戦略から見れば中共は、昭和11年国共合作以降、蒋介石軍が日本と戦闘を拡大すれば、共産軍は楽になり、勢力を拡大して、他日国民党軍を圧倒できる。(重光・東郷p165)
- 昭和11年綏遠事件で蒋介石軍が勝利を治め、「関東軍恐るるに足らず」という自信を持たせた。盧溝橋事件後に蒋介石の強硬な声明は全中国のナショナリズムを感奮興起させた。(重光・東郷p167)
- 日本の軍部には事変不拡大の方針はあったが、軍の威信を傷つけることは絶対に許さない姿勢で、これほど挑発しやすい軍隊はなかった。(重光・東郷p167)

自発的な国民的熱狂

- 昭和前期史を通じて、統帥権を振りかざす軍の独走が日本を破滅に導いた、と言うのが戦後史観の一つのステロタイプだが、むしろ世論、マスコミの愛国主義的熱狂の方が日本を動かした本当の力だったかもしれない。(重光・東郷p202)
- 支那事変勃発後、マスコミ、世論は政府の強硬態度支持、軍部礼賛の一角となった。(重光・東郷p204)
- 加えて近衛の人気は圧倒的。ラジオの普及で演説により大衆に訴えるのは世界的な時流。ヒットラーの大師子吼はドイツ内外に絶大な影響。(重光・東郷p204)
- 強行論に反対する言論はなかなか見当たらない。石橋湛山は「残念ながら今日の新聞は毎日毎日国交破壊に努力こそして、国際関係を平和に導こうなどという気持ちは寸毫ももたない機関である・・」(重光・東郷p205)

ご清聴ありがとうございました